

はじめての拓本採り

山口正義

昨年、八十歳で亡くなった長兄は郷土史に興味を持ち、長年に渡って郷土誌に様々な文章を寄稿していました。貴重な文章も沢山あるので一冊の本にまとめることにしましたが、その過程で実家近くにある旧主家で郷村支配者の墓地について記述のあることを知りました。少し興味を持ち調べてみると、その墓地にある名主を務めた人の墓は台石に沢山の筆子の名があり、また墓石の両側面には辞世の句のあることを知りました。但し、苔むしているためかよく読めないのです。

それより以前、筆者はある和算家の墓を調査したことがあります。裏面にある碑文を読もうとしましたが風化のためよく読めず、その和算家の経歴・伝系がわからず悔しい思いをしたことがありました。近辺の和算家を調べている筆者にとつて、このようなことは初めてではないのですが…。

ここに至って、ひよつとしたら拓本を採れば少しは読めるのでは、と思いつきました。しかし、拓本の取り方を教えてくれる知り合いもいないし、どうしたものかと思っていました。仕方なくネットで取り方を少し学び、その上で拓本セットを購入してみました。そして家で簡単な練習をしてから、好天の日に件の辞世の句の拓本採りに挑戦してみました。

まず、辞世の句の場所辺りを歯ブラシできれいにしようと思いましたが、苔を落とすことになってしまったのでまずいと考え止めました。そして拓本用紙(画仙紙)を墓の側面に垂らしてみると、持参した用紙が短かったため全体をカバー出来ませんでした。仕方なく用紙を斜めに利用して誤魔化しました。そしていざ貼ろうとしたら、紙の裏表がわかりません。指先でどちらが滑らかだろうかと感触を確かめたがわからず、まあいいかと、勝手に滑らかと思った面を墨を塗る側にしました。そしてセロテープで上と両脇を留めました。霧吹きで紙を濡らすとしわになるだろうと思ひ下側は留めませんでした。

次に、霧吹きで紙を濡らしながら「綿」で紙を押しつけます。この作業を続けると濡れた紙にしわがより、先ほど貼ったセロテープを貼り直さざるを得なくなります。困ったものです。綿で押しつけ、中の空気も除外したら、今度は打ち刷毛です。これにより可成り文字が浮き出てきます。但し、要領よく手早くやらないと徐々に紙が乾いてきてはがれてしまいます。何回か経験しました。その乾き具合が問題なのですが、次にタンポに墨(油墨)を付けてから、そのタンポで紙の上を軽く叩いて行きます。文字が浮き出て、初めてのときは感激します。が、タンポに墨を一樣に塗るのが、また叩くのを一樣にするのが難しい。

こうしてどうにか、はじめての拓本採りを行いました。そうそううまく行く筈ありません。紙の貼り方、霧のかけ方、綿や刷毛での打ち方、タンポへの墨塗り、タンポの叩き方など、何回も経験する中から要領を覚え、うまく採れるようになるでしょう。前述の和算家の碑文にも挑戦したいし、出来れば芸術性のある採り方をし、部屋に飾りたいとも思うのですが…。

墓の両側にあつた辞世の句とは次のような面白いものでした。粋な名主だったのかも知れません。

ミ奈さらハ此世に心残なく

我が古里へ急ぐ旅立



美那さらへ

つひにこの世の

なごりかな



さて、次に挑戦したのは秩父は横瀬町の「大越数道軒」という全く知られていないマイナーな和算家の墓。俗名を大越芳太郎正義といいます。明治初年の人で、附近の幼児のむし歯の痛みを算盤によって止めたと言い伝えがあるほど算術に精通したといわれますが、伝系などを含めた詳細は不明です。むし歯云々の話は、天元術などを扱ったことが一種の神秘さとなり、逸話を生むことになったのではないかと思われれます。

墓は、「数道軒大算芳學居士」とあり、台石には「算術」の文字とともに百名以上の門人の氏名が刻まれていて、門人の育成に努力し、慕われていたことがわかります。

墓の存在は一年以上前から承知していましたが、左側面に刻まれている歌（辞世）は見づらくてどのようなものかわかりませんでした。いつかはこの歌を読みたいと思っていました。六月に持ち主の許可を得てやっと拓本を採らせて頂くことができました。墓の高さは一メートル程は



あるもので、歌の文字範囲の高さは八十センチ近くあり、初心者が拓本を採るには随分と大きく感じました。全体を霧吹きで濡らしながら、「綿」で紙を押しつける作業はなかなか一様には行かず、しわが寄ったりして四苦八苦でしたが、どうにか採ることができました。

文字は思った以上にくっきり浮かび上がり、その字体の美しさに大いに感激しました。が、何としても読めない文字が幾つかあり全体の意味がわかりませんでした。辞書と格闘しても残念ながら読めませんでした。それで、大変恐縮なことは承知していましたが、古文書研究会の方に読み方を御願ひすることにしました。程なくしてその方は次のように見事に読んでくれました。

楽しさは 老木に花の ここちせり

数の梢に 実をや結ひて

少し難しい歌のように思いますが、和算家らしい歌とも思いました。



今後も、今少し拓本採りの腕を磨きたいと思っています。お役に立てる自信はあまりありませんが、もし、皆様の中で拓本に採りたい石碑等がありましたら声を掛けて下さい。

〔古文書はむら〕第5号、平成26年9月